



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ラケル部族とレア部族
Author(s)	宇野, 光雄
Citation	基督教学, 2, 28-41
Issue Date	1967-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46208
Type	other
File Information	2_28-41.pdf



ラケル部族とレア部族

宇 野 光 雄

筆者はかつて、論文「イスラエル宗教連合北大文学部紀要八号」において、一、イスラエル宗教連合の成立二、その構造三、その特質について論究したのであるが、このうち、一、イスラエル宗教連合の成立に関してはM・ノートの学説にもとずきつつ、この民族が十二部族の宗教連合として、パレスティナにおいてはじめて成立したことを考察した。しかし、この考察においてS・モーヴィンケルが、ノートの十二部族宗教連合説に反対し、十部族の宗教連合であったと主張していることを知り、この点について、「註」を附しておいた。（上掲拙稿、二六頁、三一頁参照）しかし、紙数の関係上、上記論文においては、モーヴィンケルの論究を、それ以上取扱うことが出来なかったので、この機会に、ここで再びこの問題を取りあげ考察してみたいと思う。

ここで取りあげるS・モーヴィンケルの論文は、S. Mowinkel, *Rachelsstämme und Leastämme, Von Ugarit nach Qumran, Beiträge Zur Alttestamentlichen und Altorientalischen Forschung* (O. Eissfeldt) で本文括弧内の頁数は、この本の頁数を示す。

一

モーヴィンケルは、イスラエル連合が宗教連合として成立したと言うノートの学説を承認する。しかし、ノートが十二部族の宗教連合として成立したと言うことに反対する。即ち連合の構成部族数は「十二」でなく「十」であったと主張するのである。（一三七頁）それでは、如何なる根拠にもとずいて、ノートの十二部族説に反対して十部族説を提唱するのであろうか。

ノートが、イスラエルが十二部族の宗教連合として成立したことを論証するにあたって史料として考察の対象にしたものは、形式を異にする二つの部族のリストである。即ち、その一つは、創世記二九章三一節以下の族長の生誕物語、四九章のヤコブの祝福に記録されている、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ダン、ガド、アセル、ナフタリ、ヨセフ、ベニヤミンであり、他は、民数記二六章の部族のリスト、即ち、ルベン、シメオン、ガド、ユダ、イッサカル、ゼブルン、マナセ、エフライム、ベニヤミン、ダン、アセル、ナフタリである。（傍点は筆者）ノートは、この形式を異にする部族のリストを、それぞれ連合時代（士師時代）のある時期における構成部族を示していると推定し、こうした形式の相違を考察することから、この連合の状態を明らかにしようとした。（上掲拙稿二五頁以下参照）そして、第一の形式と比較するとき、第二の形式では、レビの名が欠け、その位置をガドが占め、更にヨセフの分枝であるマナセ、エフライム（創世記四八章）が独立した部族としてヨセフの位置を占めていることに注目し、恐らくこうした事態は―レビ部族は、われわれの知り得る歴史時代には部族として存在しなかったことが明らかであるから（ノートは、ここから第一の形式を第二の形式よりも古い時代に属すものと考えた）―この連合がその構成員として十二部族を保持するためにとった措置を物語るものと考え、ここから、この連合にとって、この十二の数が、連合存続のために必須の条件であったと判断したのである。また更に、ノートは創世記二九章一一節以下の十二族長の生誕物語から、これらの部族が、レア六部族、ラケル二部族、その他四部族の三つの部族群に区分されることに注目し、この部族群はそれぞれ他の群に比べて、その構成部族はより緊密な間柄にあったと推測し、こうした推測にもとづいて考察を進め、以下のような仮説を提起したのである。即ち、かつて南方沙漠地帯で崇拜されていたヤハウェを、この神との契約を通して己が神として受容した集団（氏族群）のパレスティナ中央山岳地帯への移住後、この集団が中心となってレア六部族が成立し、まずこの六部族による宗教連合が生じ、その後、パレスティナ周辺を遊牧し、エジプト脱出時の神の救済体験の伝承を共通の伝承としてもつことになった集団がパレスティナに侵入

し、その定着に至る経過を通して諸部族を形成し、またレア六部族との接触を通して、シナイの伝承と出エジプトの伝承が結合し、両者の神が結局同一の神に外ならないものとされ、ここに十二部族の参加する宗教連合が成立したのではないであろうかと。その際、ルベン、シメオン、レビ等は既に弱体化していたが、古きレア部族群において占めていた地位、また十二部族連合成立において果たした役割によってその地位が認められ、第一の形式の示す地位を得たのではないかと。(上掲拙稿三〇頁以下参照)

さて、以上の叙述から明らかなように、ノートの十二部族の宗教連合説、宗教連合成立経過に対する仮説は、彼が上記の諸伝承をイスラエル連合のあり方を示す確実な史料として取上げ、この史料にもとずいて考察を進めた結果であつた。従つて、もし上記の諸伝承が史料たる価値を失つた場合は、ノートの十二部族説、レア六部族から十二部族への形成経過の仮説もその論拠を失うことになるであらう。

モーヴィンケルが、ノートの十二部族説に反対した根拠はまさに此の点にあつたように思われる。モーヴィンケルは、上記の諸伝承をイスラエル連合のあり方を示す史料と考へない。ノートは史料価値をもたない資料にもとずいて「十二」という数を出している。従つて十二部族説は誤りである。連合の構成部族を示す唯一の史料は、士師記五章のデボラの歌であり、ここに出て来る十部族―エフライム、ベニヤミン、マキル(マナセ)ゼブルン、イッサカル、ナフタリ、ルベン、ギレアデ(ガド)、ダン、アセル―のみが士師時代におけるイスラエル連合の眞の構成部族であり、従つてイスラエルは十部族の宗教連合として成立したと主張するのである。(二三七頁)

二

それでは何故ノートが確実な史料として取りあげた上記の諸伝承をモーヴィンケルは、史料としての価値をもたないものと断定したのであらうか、またもしモーヴィンケルの言うように、デボラの歌を唯一の確実な史料とし十部族を主張するならば、この歌で、シメオン(士師時代には既に弱体化し、イスラエルのうちに分散したと考えられる―上掲拙稿二

六頁参照)は別としても、イスラエル史において最も重要な役割を果すことになるユダ部族が欠けていることは、どお説明すべきであろうか。

以上のような問題に対するモーヴィンケルの論考を、(一)ユダ部族(二)民数記二六章(三)創世記二九章三一節以下の十二族長の生誕伝承の順に見てゆこう。

(一) ユダ部族

ユダ部族は、士師時代を通して、イスラエル連合の構成員ではなかった。ユダは本来地名であり、士師時代にはユダ部族は存在しなかった。南方に居住する諸氏族が、ペリシテ人に対抗するため、ペリシテ人を共通の敵とするイスラエルのサウルに従属してから、ユダの諸氏族との名を得、部族としては、ダビダがヘブロンで王位に即いた時「ユダの王」と宣言したときにはじまる。A・フルトが、イスラエルとユダは本来二つの異なった民族でなかったかという印象をぬぐいきれないと言っているように、本来イスラエルとは関係のないものである。イスラエル伝承史において果しているユダ部族の役割は、実はダビダがイスラエルの王となって後、イスラエルとユダの永続的結合を意図し、そのためイスラエルの諸伝承をユダの立場から取り入れ、イスラエル部族組織の一員としたのである。即ち、大イスラエルと言う理念にもとづく政治的イデオロギーの所産である。(一三七頁、一三八頁)これを如実に物語るものは、創世記四九章のヤコブの祝福である。ここで述べられているユダに関するものは、明らかにダビダ王国以前のものであり得ない。何故なら、ユダから将来王笏をもつものが出、部族は他部族の支配者となるであろうという予言は、ダビデの王位についた事実から出たと考えられるからである。(二三九頁)

(二) 民数記二六章

詳細な部族のリストを伝える民数記二六章は、P典であり、捕囚後のものである。ノートは、このリストのなかに王国創始以後でてこない古いカナンの地名が記録されているとし、これを論拠として、以下のように考えている。即

ち、この部族のリストは勿論捕囚後のものであるが、作成にあたって、編纂者は士師時代に起源をもつ、恐らく他の目的のために作成された原資料を使用したのではないか。従って、士師時代の状態を示していると、しかし、ノートの論拠はいわば間接的証拠にすぎない。むしろ士師時代を示していないことを証明する記事が多い。第一にこの部族リストは、シメオンをあげている。しかしシメオンはデボラの歌にはでて来ない。また歴史的に言って、シメオン部族は事実存在しなかったと言える。第二に、歴史的に大なる役割を演じたものとして文献にでてくる、カレブ、オトニエル等当然ユダ部族のリストにでて来なければならない氏族名が記録されていないこと、従ってユダに関するリストは歴史的事情を反映していない。第三、マナセのリストにでて来る各氏族名は、王国時代の徴税地区名と一致していること。最後にマナセがエフライムより優位を占めていることである。士師記八章一節以下の記事、また十二章一節以下の記事から明らかなように、士師時代を通してエフライムが優位を占めていたのであり、マナセが優位を占めたのは、王国時代に入ってからである。以上の記事はいずれも民数記二六章の記事が士師時代のイスラエルの状態を示していないことの論拠となるであろう。此のように見てくると、民数記二六章の部族のリストはダビデ以後のものと言いうことが出来る（一三九—一四一頁）。

(三) 創世記二九章三一節以下の伝承

伝承は、十二族長の生涯をヤコブの四人の妻にそれぞれ配属している。即ち、レア：ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン (六)、ラケル：ヨセフ、ベニヤミン (二)、レアの侍女ジルバ：ガド、アセル (二)、ラケルの侍女ビルハ：ダン、ナフタリ (二) である。ノートは、これをレア部族群、ラケル部族群、その他の部族群に区分し、それぞれの群に属する部族が、他の群に属すものより、相互により緊密な関係をもつと考えた。こうした考えは、一人ノートに限らず、それ以前から多くの学者にいだかれたものである。しかし、これは誤りである。所与の伝承を歴史的事実を反映するものとして、そのまま受け取る前に、一度それを個々の要素にわけて検討し、更に、その個々の要

素が今日の姿をとるに至った過程を考察しなければならない。以上の立場から、この伝承を民族学的、伝承史的観点から検討する時、新しい事実が浮んで来るのである（一三〇頁）。

まず第一にヤコブとイスラエルである。創世記三二章二三節―三二節の記事は、ヤコブがイスラエルと改名することになった原因譚と見られるのであるが、しかし、この記事の本来の目的は、この原因譚を語ることでなく、聖所とその聖所の禁忌事項縁起が中心を占めていた。ヤコブのイスラエル改名は後からこの縁起に追加された二義的のものに過ぎない。民俗学的見地から見れば、こうした伝承は、明らかに、ヤコブとイスラエルが別人であったことを語っているのである。更に創世記においてヤコブがイスラエルとなった後も、ヨセフ物語を除いては専らヤコブであり、その伝える内容は、メソポタミア、シリアの文化である。イスラエルの名の多くでてくるヨセフ物語りは、出エジプト記の伝承と結びつける意図的編纂であり、民話的性格をもち、歴史的事実を伝えるものとは言えない（一四二頁、一四三頁）。

以上のように、ヤコブとイスラエルが、本来相互に何等関係をもたない別人であったとするならば、以下のような推測が可能となるであろう。即ち、ヤコブを祖先として崇拜する集団（氏族を単位とする）―ヤコブ人―ヘブル人―とイスラエルを祖先として崇拜する集団―原イスラエル人―とは本来何等の關係を持たない別個の集団であった。そして、創世記の伝承が殆んどヤコブの名に結びついていることから、またメソポタミア、シリアの文化を示していることから、ヤコブ人は、北から南下したものであり、一方イスラエル人は南方沙漠地帯から北上したものである。こうした推定が事実とするならば、ヤハウェ礼拝を伝えた者は、原イスラエル人に外ならないことになる。恐らく原イスラエル人は、カデシ付近を根拠地とする遊牧民で、かつてエジプトに赴き、そこから脱出して、再びカデシ付近に帰り、ここで彼等の父祖の神を受容したものであろう（一四二頁、一四三頁）ヤコブ人のパレスティナへの侵入、定着がまず行なわれ、その後原イスラエル人がこの地に侵入し、両者の接触融合が生じ、後世イスラエル連合の構成

員となる部族が形成されていったと推定することが出来る。その際神から先祖ヤコブに約束された土地授与の伝承が共通の伝承となり原イスラエル人も、この伝承にもとづいて土地所有の権利を主張出来たと考えられる（一三二頁）。

さて、以上のように伝承の伝えるヤコブとイスラエルの関係をとりえることが出来るとすれば第二に、ヤコブの四人の妻、レア、ラケル、ジルバ、ビルハとヤコブとの関係はどおであらうか。

「レア」という語は、アラビヤ語との関連から、牝の野牛の意ともとれ、またその語根から解釈すれば蛇の意ともとれる。牡牛、牝牛は、共にカナンの古き豊穰神のシンボルであり、また神の別名でもあった。また蛇も同様、生産力のシンボルであり、豊穰を司る女神の別名であった（一三四頁）。こうした解釈によれば、レアは本来人名でなく、土地の住民から崇拜されていた女神でなかったかと考えられる。

「ラケル」と言う語は母羊を意味する。これも本来生産力を意味する言葉である。また伝承で「ラケルの墓」がでて来るが、近東アジアにおいて、生産力、墓という観念は、生産を司る神または母神の特徴である。また伝承で、ある期間不妊であったと伝えられているが、これは、母神の敵モト（死の神＝旱魃）が支配していたことを意味する。この「墓」は、今日のシリア、パレスティナにおいて、女神の礼拝場所＝聖所であり、アラビヤ語の *badn* は聖所を意味すると同時に墓をも意味する。更に伝承から、「ラケルの墓」はエフライムの山地にあったと推測される。このように見る時、ラケルもレアと同じく人名ではなく、そのはじめ、エフライムの山地を中心とする牧人層から崇拜されていた女神であったと推定される（一三三頁）。

「ジルバ」「ビルハ」は語根から解釈して、前者は「悪」後者は「驚愕」を意味する。これも同じく女神と考えられる。伝承においてレアとジルバ、ラケルとビルハがそれぞれ結びつけられているが、これは元来同一女神の相反する性格を意味したものと推測できる。例えば、ラッシュラム文書にてくる女神、アシユタルト、アシエラア、アナトは、慈愛に満ちた愛の神であったと同様、他方では、血を喘ぎ求める戦争神であった。また、生産の主であるバア

ルと死の神モトが、同一神の相反する機能が分裂して、それぞれ独立した二神となったと考えられることから、レア、ジルバ、ラケル、ビルハも、もと同一神の相反する機能が分裂して二神となったとも推測できる（二三五頁）。

さて、以上のように四人の妻が、女神を意味するとすれば、これらの女神と族長ヤコブとの関係はどおであるか。

神話的人物像となった族長と女神との結合は、周知のように、アブラハムとハランの女神サラ、ナホルと女神ミルカの結合が示すように十分可能である。恐らく、ヤコブ人がメソポタミアの草原地帯、山麓の牧草地帯を遊牧していた段階で、ヤコブとレアの結合が生じ、その後エフライム山地への移動定住後、この地で崇拜されていた女神ラケルが第二夫人としてヤコブに結びついたものと考えられる。ジルバ、ビルハとの結合、またその時期に関しては不明であるが、これは、こうした遊牧民の間で好んで語られた不妊の妻がその侍女によって子を得ると言う民話、または、そうした慣習と関係あるものであろう（二三四頁、一三五頁）。

さて、以上の推定が正しいとすれば、ヤコブと四人の妻との関係は、伝承の性格―文化宗教等がメソポタミア、シリア、パレスティナのそれを示している―から原イスラエル人の侵入よりはやかたと言える。すくなくともレアとラケルに関しては明らかである。またその際古きレアに対して、家畜の繁殖を司る母神として崇拜されたラケルが、ヤコブの最も愛するものとなったことも、その住民となったヤコブ人とその墓との新しい結びつきから言って当然の結果と言える。

第三に十二族長の生誕はどおであろうか。ヨセフから考察して行こう。ヨシヤ記二四章三二節で、エフライムの山地にヨセフの墓があったことが示されている。ここでは、エジプト脱出の時、イスラエル人がヨセフの骨を持って、カナンの地に入り、この地の征服後ここに埋葬したと記されている。しかし、こうした説明は、あとで編纂者によって創世記のヨセフ物語りと関連させるために意図的に加えられたものである（一四三、一四四頁）。ここで明らか

なことは、この地に「ヨセフの墓」があったと言うことである。この墓は、古くはその地の住民が先祖の墓とし、守護神の住居として崇拜した聖所 (shrine) であったと考えられる。ヤコブ人移住の後、この聖所はヤコブ人の聖所となり、その礼拝に参与すると共に、その礼拝行為を通して、いつかヨセフを彼等の族長の系列に加え、ヤコブの愛する妻ラケルの子とされることになった。その後原イスラエル人の侵入があり、エフライム山地での定住生活において、ヤコブ—ラケルの伝承、またその崇拜を知り、ヤコブ—ラケル—ヨセフの伝承を受容することになった。原イスラエル人の多くはヨセフの子となり (一四六頁) そして、ヨセフの子となった原イスラエル人の中から、後世、イスラエル連合形成において指導的役割を果たすものがでたと推察される (一四二頁)。またヤコブ人のうちある要素が、これに加わったことも当然予測できる (一四二、一四四頁)。従って、このヨセフはヨセフ物語りにでてくるエジプト脱出時の原イスラエル人とは、本来何の関係も、もたなかったと言える。

ベニヤミンは、伝承では、ヨセフの弟となっているが、伝承史的に見れば、ラケルの子となったのはヨセフより前であったと推測される。ベニヤミンとラケルの関係は、ラケルの墓礼拝における、ラケルの死を語る聖所縁起から生じたものと考えられる。女神ラケルは何故死んだか、これに対する答が伝承の語るベニヤミンの誕生である。ラケルは子供の出生のために死んだのである。即ち、民族的に言って、これは新しい生命力、祝福の担い手の誕生である。この誕生によって住民に新しい繁栄の時代が約束されるのである。このことは、死に際して、ラケルが子をベニ (私の苦しみの子) と呼んだのに対して、ヤコブがベニヤミン (幸福の子) と変更したことを伝える伝承 (創世記三五章十八節) から推測できる。聖所縁起において、女神の死は、それに代わる一柱の新しい神で十分である。従って、ベニヤミンとラケルの関係は、ヨセフとラケルのそれよりも古いものであったと考えられ、また、後からラケルの子となったヨセフがベニヤミンの兄たる地位を得たのである。ヨセフの子等と、ベニヤミンの子等とは、古くから密接な関係をもっていたと考えられる。パレステイナのベニヤミン (南からの子) は、マリー文書の半遊牧民ベネーヤミニ

イーと無関係ではなかったと思われ、メソポタミヤから移住したヤコブ人に属していたと推測される（一四五頁）。

以上のラケル―ヨセフ、ベニヤミンの系譜は、原イスラエル人の侵入以前に既に確定していたと思われる。従って、その後ヤコブの子となったものはレアと関係づけられることになった。

レビ、シメオンは、部族として成立したことがあった。しかし、それは原イスラエル人の侵入以前のことと思われる。そして、原イスラエル人の侵入時には既に消滅していた。創世紀三四章の記事は、ヤコブがシケムのハモル一族と契約関係を結んでいたこと、シメオンとレビの裏切り行為が父ヤコブに嫌らわれたことを告げている。この記事は原イスラエル人の侵入以前と考えられ、この当時シメオンとレビがヤコブの子となっていたことを示している。この二部族は、メソポタミヤから移住したヤコブ人に属するものでなく、シナイ半島からネゲブを通じて来た部族群に属するものと考えられる（一四六頁）。

ルベンはデボラの歌にあるように連合の構成員であつた。伝承はルベンがヤコブの長子であることを繰り返し伝えているのであるが、このことは、イスラエ人ととの関係からでてこないのである。ヤコブの祝福は、ルベンを長子でありながら最早やすぐれたものでないと伝えている。ヨシュア記一五章六節にあるボハンの石についての記事から、ルベンは原イスラエル人の侵入以前エフライム山地付近にいたことが推測され、ヤコブ人に属していたと言えることができる（一四七頁）。

原イスラエル人の侵入以前にヤコブは他に子をもつたか、別言すれば後世イスラエル人となった部族が尚他にいたかどうかは明瞭でない。ただメサ碑文で、ガド（ギレアデ）がイスラエルと区別されているところから見てこの可能性があるように思われる（一四七頁）。いずれにせよ、原イスラエル人の侵入以前に、以上のヤコブの子等（氏族または部族）の間に一つの組織が成立し、ルベンを長子とするレア、ラケルとの関係が成立していたと考えられる。

原イスラエル人の侵入後、新たな部族が出現した。マキル（マナセ）が、エフライムの北方への拡大によって、ダ

ン（エフライムに属する一氏）は北方への移動によってそれぞれ独立した部族となり、それと共に、イスラエル以前の古き諸伝承が受容され、ヤコブ―レア―ラケル、ヨセフ、ベニヤミン、ルベン等々の関係が、各部族間の関係にあてはめられ、系譜的に組織化されていった。ヨセフとベニヤミンはラケルの子として、兄弟とされ、北方に位置した部族、ゼブルンとイツサカル（ヨセフ諸部族の拡大の結果成立）は地理的位置により兄弟としてレアに、――士師時代と思われる――、ダン（エフライムの一氏族であった）とナフタリは地理的理由によって、ラケルの侍女ビルハに、――士師時代と思われる――、ガドとアセルは、語源的理由（共に幸福を意味する）によって兄弟とされレアの侍女ジルパに、それぞれ区分されたのである（一四八、一四九頁）。

さて、こうした系譜的組織化が行なわれた具体的事情、完成した時期等は明瞭でない。しかし、士師時代においては、最大限十部族の系譜以上のものはなかったと思われる。それでは、今日の伝承の伝える十二部族の系譜はいかにして成立したであろうか。

ユダは士師時代において連合の一員ではなかった。従つてこの系譜とも無関係であつた。伝承の伝える十二部族の系譜は、イスラエルとユダを統一したイスラエル王国の永続を願うダビデ王朝のもとで意図的に作成されたものである。ダビデ王朝が、イスラエルを含む王国を維持し、その正当性を得るためには古き歴史をもつイスラエル連合の一員にユダを加える必要があつた。しかし、十部族にユダを加へ単に十一とすることはできない。また王国時代既に消滅していたルベンを取り去つて代りにユダを置くことも出来ない。何故なら士師時代には、尚残存せるルベン人が東ヨルダンにおいて連合の一員として数えられ、伝承においては長子としての地位を得ていたからである。古き伝承を生かすためには、更に、ヤコブの子として伝えられているシメオン、レビも共に取り入れる必要がある。またこの三者を取り入れることは逆にユダにも、その場所を与えることになる。現実にルベン、シメオン、レビは消滅しているのであるから次におかれるユダは現存せる諸部族の長兄となり、支配者としての正当な資格を得ることが出来る。し

かしこれでは十三になる。この数は十一と同様不可能である。数は聖なる数として十二でなければならぬ。マナセとエフライムは共にヨセフの子であるから、これを合せてヨセフとすれば数は十二となる。今日の伝承の伝える十二部族の系譜は、恐らく、古き伝承を資料として、以上のような手続を経て作成されたものと考えられる(二四九頁)。従って、ノートが民数記の部族のリストより創世記二九章三一節以下の部族のリストをより古いものとしているが、これは逆である(一四二頁)。

三

以上はわれわれが掲げた前述の問に対するモーヴィンケルの論考を筆者の理解に従って(一)ユダ部族(二)民数記二六章(三)創世記二九章三一節以下の十二族長の生誕伝承の順に整理しその大要を述べたものである。モーヴィンケルは、士師記デボラの歌をイスラエル連合の部族を示す唯一の史料と考え、そこからイスラエルは十部族の連合として成立したと断定し、ノートが確実な史料として取り上げた前述の形式を異にする部族のリストを民俗学的、伝承史的観点からこれを分析し、それを検討することによって部族の系譜が今日の姿をとるに至った経過を以上のように推定し、これは後代の意図的編纂によるもので従って虚構的、理論的構成の所産であると断定し、ノートとは全く異なるイスラエル連合形成の新しい仮説を提唱したのである。

今、以上のモーヴィンケルの論考に対して一、二私見を述べて見たい。

第一は、モーヴィンケルがノートのイスラエル宗合連合説に対して、その学説の大部分を承認するが、ただ「十二」という数にだけ反対すると言っていることである(一三七頁)。しかし、モーヴィンケルは、ノートが論証にあたって確実な史料として取り上げた伝承を史料価値なきものとし、更にそれが後世の虚構的理論的構成の所産であると断定しているのである。筆者の理解に従えば、ノートの使用する上記の史料が虚構であるとするならば、ノートの宗教連合説は最も重要な論拠を失うことになり、その学説を、根本的に修正しなければならないことになる。従ってモ

ーヴィンケルが、ノートの学説の大部分を承認し、ただ「十二部族」でなく「十部族」の宗教連合として成立したと言う場合、上記の史料価値を否定する限り、モーヴィンケル自身もその論拠を失い、新にイスラエルが十部族の宗教連合として成立したことを、士師記デボラの歌を論拠として論証しなければならないと考える。しかし、モーヴィンケルはヤハウェ神の受容を原イスラエル人の中からエジプトに赴き、脱出後再びカデシ付近にもどった者が、ここで父祖の神を受容したと言っているに過ぎない。此の点多くの疑問を残すのである。この論文では、創世記だけを取り扱い、出エジプト記の、神の救済、シナイの伝承等に全然ふれていないのであるが、ノートの学説とは異なるのである。恐らくモーヴィンケルは一方では、イスラエルが宗教連合として成立したことを自明のものとし、他方士師記デボラの歌を唯一の史料と確信することから十部族の宗教連合として成立したに違いないと断定したものとと思われる。しかし、デボラの歌も、イスラエルの長き連合時代の一時期を示しているに過ぎず、イスラエル連合の成立時の事態を示しているものでない。またユダ部族は士師時代を通してイスラエル連合と関係をもたなかったと言うのであるが、この論考が正しいとすれば、モーセ六書及び士師記に出てくるユダの記事は、すべて後代のものか、後代の編纂において、意図的に挿入されたものと言うことになる。このことについてはふれていないのである。確かに、ダビデ出現から王国の創始、更に王国の分裂に至るイスラエル史を検討する時、イスラエルとユダとの性格の著しい相違に気付くのである。統一王国樹立において、ダビデのイスラエル諸部族に対してとった並々ならぬ配慮、王国分裂に際して、北方諸部族のユダに示した態度（拙稿イスラエル史における王権の確立とその特質、北大文学部紀要十二号参照）からA・アルトのようにイスラエルとユダは本来異なる民族でなかったかと言う印象を受けるのである（A. Alt, *Kleine Schriften z. Geschichte d. Volkes Israel*, 1953, II, S. 1 ff.）従って、モーヴィンケルの言うように士師時代を通してユダが連合の一員でなかったとするならば、以上の相違の由来するところが実に判然とするのである。しかし、後代の歴史事情から受ける単なる印象をもって十分の論証を経ずして、デボラの歌を唯一の史料とし、ユダがこの連合と

關係をもたなかったと断定するならば、それは独断の謗を免れないであろう。われわれは、此の点に関するモーヴィンケルの提唱をユダとイスラエルに関する注目すべき問題提起として受取るに止めたいと思う。

第二は、モーヴィンケルが十二族長の生誕伝承を民俗学的、伝承史的立場から分析し、検討していることである。

ヤコブとイスラエル、レアとラケル、ジルバとビルハ、ヨセフとベニヤミン等々に関する民俗学的、伝承史的考証は、確かにわれわれに多くの指唆を与えている。またノートがこの伝承を所与のものとして受取り、十分な検討を加えずに史料としたことを鋭くついている。しかし、伝承を細分して個々の要素にわけ、他の伝承との関連を考えず民族学的方法を個々の要素に適用させた結果解釈が一方的になっているように思われる。例えばヤコブとイスラエルが別人であったと推定する論拠は、民俗学の方則によつてとだけ述べ、更に、そこから直ちにヤコブ人と原イスラエル人を全く別個の集団と推定しているように思われ、またエフライム、マナセ、ゼブルン、イツサカル、ダン、ガド、アセル等に関しては説明がなく、論旨が一貫していないように思われる。またその解釈をもとに、個々の要素からもとの全体を構成する時、論拠がやはり不十分である。例えば、地理的理由、語源的理由によつて異なる部族が兄弟部族とされたとの推定は、十分なる論証とは言えないであろう。これは今日の旧約文献のあり方から言つて止むを得ないところと思われるが、しかし、半面、モーヴィンケルが、十二族長の系譜をユダ王朝下における、編纂者の意図的作品と断定し、その断定がさきにあつて、論拠不十分のまま形を整えようとした結果でないかとも考えられるのである。いずれにせよ、モーヴィンケルの以上の論考から、われわれはイスラエル民族成立経過を明白に知ることができず、むしろ増々多くの問題がでてくるように思われるのである。